

<株式会社エフエム東京 第353回放送番組審議会>

1. 開催年月日：平成20年11月11日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社10階大会議室
3. 委員の出席：委員総数7名
◇出席委員（6名）

子安美知子	委員長	青池慎一	副委員長
内木文英	委員	渡辺貞夫	委員
内館牧子	委員	横森美奈子	委員

◇欠席委員（1名）

香山리카	委員
------	----

4. 議題

- (1) 最近の活動について
- (2) 番組試聴：「苑子ちゃんの手紙」ダイジェスト版
2008年5月29日（木）21:00～21:55放送分

<試聴時間：約20分>

≪議事内容≫

議題1：最近の活動について

◎ 第4回日本放送文化大賞 「苑子ちゃんの手紙」が準グランプリを受賞

全国の民放ラジオ、テレビで良質な番組がより多く放送されることを促す目的で（社）日本民間放送連盟が2005年より毎年実施している日本放送文化大賞ラジオ部門において、TOKYO FM制作「苑子ちゃんの手紙」が準グランプリを受賞しました（10月28日 民間放送全国大会にて発表）。TOKYO FMは第1回「ザ・ライン～僕たちの境界線」で準グランプリ受賞、昨年（2007年）の第3回「SCHOOL OF LOCK」でグランプリ受賞に続いて3回目の受賞となりました。

＊「苑子ちゃんの手紙」

千葉市の中学3年生、松井苑子ちゃんはウィリアムズ症候群という障害を持っている。学校で一般の生徒と同じように授業を受けている苑子ちゃんは毎朝全校生徒に丁寧に挨拶をする。そして毎日級友や先生に何十通もの手紙を送る。ウィリアムズ症候群の子供は人なつこい社交性と音楽に優れた才能を持つという特徴を持っている。そこに着目した母親は娘の将来を音楽に託そうと考える。番組は苑子ちゃんの日々を追い、音楽を通して成長していく姿と、健常者が忘れがちなピュアな心の交流を描く。

◎ FM FESTIVAL RADIO AWARD IN JAPAN “LIFE MUSIC 2008” 開催

JFN系列全国38局では、11月3日(月・祝)から、「FM FESTIVAL RADIO AWARD IN JAPAN “LIFE MUSIC 2008”」を実施しています。これは、この一年にリリースされた楽曲を対象に、CDやダウンロードなどのセールスを指標とするのではなく、今年最も人々を感動させ、心を揺さぶった“LIFE MUSIC”を、JFN38局の制作マンたちが全6部門5曲ずつノミネート楽曲として選出。そして、ラジオリスナーの投票により決定することを最大の特徴としています。1ヶ月間に渡り投票を受け、12月3日に全6部門および大賞受賞楽曲を決定します。

また、11月3日の番組内では特別企画として系列のFM北海道と連携し、この日ロックバンドGLAYが、北海道夕張にて地元の中高生に向けて実施したアコースティックライブの模様を一部独占生中継し、二年前に財政破綻した町に勇気と希望を与えたい彼らのメッセージを伝えました。このイベントはラジオ告知もせず、地元の中学校、高校とコンビニエンスストアだけにチラシを貼って招待するという、まさにGLAYと市民との手作りで運営された人の温もりの溢れるものでした。

議題2：番組試聴

【番組名】「苑子ちゃんの手紙」

【放送日時】2008年5月29日(木) 21:00～21:55放送分

【制作意図】

障害を持つ人が社会の中で、孤立することなく暮らしていくためには――。

一度は社会福祉の道を志すことも考えた、TOKYO FMの柴田幸子アナウンサーが、ウィリアムズ症候群という障害を持つ中学3年生の少女の生活に密着し、彼女の視線が追うもの、人々との関わりなど様々な場面取材し続けたドキュメンタリー番組です。取材者自身が、手探りで戸惑いながら彼女との人間関係を築いていく中で、リスナーにも、障害を持つ人とともに暮らし、関わっていくことについての意味を投げかけていきます。

一方、自分の子供が障害を持っていると診断されたとき、親はどうするか？ 社会の中で一般の子供と変わらない生活をさせることはできるのか？ 親として子供にしてやれることは何か？ 親と子の関係が様々な面で問題となっている現在、母と子それぞれの立場とあり方を、障害を持つ中学3年生の少女がたどってきた道、これから生きていく道を通して探っていきます。

【番組内容】

松井苑子ちゃんは千葉市美浜区の中学校に通う中学3年生。ウィリアムズ症候群は7番染色体の一部の欠乏による遺伝子疾患で、発生率は2万人に一人、あるいは1万人に一人といわれています。心臓や腎臓に障害があったり、発育の遅れ、学習障害、小柄な身体などが主な特徴で、数の計算や空間、形の認識も不得意。靴の紐を結んだり漢字を書いたりすることが苦手ですが、それでも彼女は通常の中学校で一般の生徒と共に授業を受け、給食を食べ、生活をしています。

毎朝全校生徒に挨拶することが日課の苑子ちゃんのいつもの日々、友達や先生とのやりとり、友達に送る何十通もの手紙……ひとつひとつの中に込められた苑子ちゃんの思いが、取材を続けたアナウンサーの目線を通して語られていきます。

障害がある一方で、ウィリアムズ症候群の大きな特徴でもある音感やリズム感に優れた才能を示す苑子ちゃん。まもなく15歳のバースデイを迎えるにあたって「苑子ライブ」を開くために、ドラム、フルート、歌、タップの特訓の日々を過ごす彼女にとって、音楽の存在とは――。3歳半で娘が初めて歩きだした時の感動から、音楽を通して娘が成長し、一步一步成長していく姿を見つめる母親の喜び、さらに、障害のある子供を持った母親の赤裸々な声を通して、親の葛藤、子供への強烈な愛情も描いていきます。

＜試聴時間：約20分＞

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側説明）

- 切り口が曖昧で総花的である。使われる表現もありきたりな部分があった。
「障害があるなしに関わらず…」という言葉で簡単に済ませていたが、その
“あるなしに関わらず”にやっていくためにはどうしたらよいか、
にもっと切り込むべきだったのではないかと感じた。

- 少々視点がありきたりすぎた。もっと別の切り口があったのではないか。
障害者をテーマにするのは非常に大切なことで、だからこそ、彼女の状況や生き様を
もっと聴かせてもらえるとよかった。

- このようなテーマを取り上げることは重要なことで、その点ではよかった。
しかし、番組が、題材自体によりかかりすぎている感じもした。
人間における多面的な能力、その一つとしての音楽の持つ可能性に触れられたのは、
FM局としてもよい視点だったと思う。また、周囲の人々との関わりが重要な影響を
与えることも、感じられてきてよかった。

- 障害者を公共の電波という、公の場に出すこと自体が、意義のあることだと思った。
柴田アナウンサーという1人の女性が、このテーマに自らのめりこんでいて悩みな
がらもこの題材を扱ったということ自体が評価されるべき点ではないかと考えた。

- 障害者の人の心境というのは、実際になってみないとわからない部分が多い。とても
大変だろうと思えても、実際には、健常者と変わらない感じで生きている人もいる。
大変だろうという視点で入ること自体が、偏見になってしまうことも多い。
もっと障害者と健常者という垣根を越えて、同じ土俵に立った視点で、なぜ彼女が音
楽をやろうと思ったのか、どうして音楽に目覚めたのか、という部分により迫れると
よかったのではないか。そこが少し物足りなさに繋がっていたのではないかと思う。

- 20分にまとめた試聴音源だと、60分番組全体のよさを感じるには少々無理があった。
他の局の作品でも、素材自体によりかかった番組というのは多い。そんな中、この番
組は、柴田アナウンサー自身の心の動き、「まだ迫りきれていない」「まだ足りない」
と葛藤する謙虚さと努力が感じられ、その部分が際立っていた。

5. 放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

- ① 放送：番組「リサ・ステッグマイヤーのクロノス」
11月28日（金） 5：00～8：30放送
- ② 書面：TOKYO FM サービスセンターに据え置き
- ③ インターネット：TOKYO FMホームページ内 <http://www.tfm.co.jp>

7. その他

次回審議会は12月2日（火）に開催することを決めた。

以上